

30B-13

白朮五苓散と蒼朮五苓散 の利尿作用に対する効果の比較

近畿大学東洋医学研究所

○織田真智子, 中西由香, 唐方, 阿部博子

【目的】漢方の利尿剤の代表的処方の一つである五苓散を構成する生薬の一つである「朮」は、「蒼朮」又は「白朮」の何れを使うべきか、はっきりした結論が得られないまま、臨床応用されているのが現状である。この白朮五苓散と蒼朮五苓散の作用を比較するためとともに西洋薬の利尿剤と漢方の利尿剤の作用を比較検討するべく、以下の実験を行った。

【実験方法】

実験1：wistar系雄性ラット、8週齢を5群にわけ、1群は正常対照群、2群は蒼朮五苓散（ヒト10倍量）、3群は白朮五苓散（ヒト10倍量）、4群は蒼朮、5群は白朮投与群とし、各々一日1回5日間強制経口投与した。

初回投与より24時間目までの尿量、飲水量を測定するとともに5日間投与後、生体内の水分布を見るため、生体内総水分量と循環血漿量の測定を行った。

実験2：wistar系雄性ラット、8週齢を4群にわけ、1群は正常対照群、2群はフロセミド80mg/kg、3群はフロセミドと白朮五苓散（ヒト10倍量）併用群、4群はフロセミドと蒼朮五苓散（ヒト10倍量）併用群とし、強制経口投与後24時間目までの尿量と飲水量を測定するとともに、生体内総水分量と循環血漿量の測定を行った。

【結果】

実験1：正常対照群に対し、蒼朮五苓散では約8%、白朮五苓散では15%尿量が増加した。白朮、蒼朮単独投与では有意な差は認められなかった。循環血漿量は白朮五苓散、蒼朮五苓散共に増加傾向にあったが、白朮五苓散で増加率が大きかった。生体内総水分量は各群で有意差はなかった。

実験2：フロセミド投与群では対照群の約2倍に尿量が増加した。白朮五苓散併用群では尿量の増加を抑制したが、蒼朮五苓散併用群には同様の作用は認められなかった。フロセミド投与群で循環血漿量の減少を認めたが、白朮五苓散、蒼朮五苓散併用群共に減少を抑制した。